

## 論文内容の要旨

氏名	村松 擁
論文題目	英語移動動詞の意味拡張に関する認知言語学的考察 — come/go を中心に —
要 旨	
<p>本論文は、認知言語学の枠組に基づく英語の移動動詞の意味拡張のメカニズム（特に英語の基本的な移動動詞（come と go）の意味拡張のメカニズム）に関する理論的・実証的研究である。</p> <p>第一章では、言語学におけるこれまでの移動動詞の先行研究を批判的に検討し、本研究の認知言語学における新たな研究の方向性を明らかにしている。</p> <p>第二章では、移動動詞の分析に際して重要な役割をになう認知言語学の下位理論の位置づけを明らかにしている。本章では、この種の下位理論として、イメージ・スキーマ理論、メタファー理論、視点投影理論を提示し、これらの下位理論が移動動詞（特に、基本動詞としての come と go）の認知分析にどのように適用されるかを明らかにしている。まず本章では、come、go の移動動詞によって特徴づけられる事態は、ある存在が出発点から経路を通過して目的地に移動していく事態である点を考慮し、この基本的な事態認知をイメージ・スキーマ理論によって規定する。（より具体的には、この種の空間移動に関わる事態は、〈起点—経路—着点〉のイメージ・スキーマによって規定される。）次に本章では、come、go の移動動詞が、単に物理的な空間移動を表現するだけでなく、より抽象的な状態変化をも表現する事実に注目し、この種の移動動詞の意味拡張を、メタファー理論に基づく概念写像によって規定する。come と go の移動動詞には、以上の〈起点—経路—着点〉の事態認知と抽象的な状態変化への意味拡張が関わっているが、これらの動詞を使用する話者の視点の置き方（すなわち、視点が話し手志向か聞き手志向か）が異なる。本章では、この認知モードの違いを視点投影理論の分析により規定する方法を提示している。</p> <p>第三章では、前章で提示したイメージ・スキーマ理論に基づき、移動動詞 go の物理的な空間移動に関わる事態認知の基本構造を、〈起点—経路—着点〉のイメージ・スキーマの観点から分析している。動詞 go の空間移動の事態に関しては、起点と着点の規定に関し、基本的に二つの規定が考えられる。その一つは、起点と着点をそれぞれ字義通りに点的に把握する視点であり、もう一つは起点と着点を空間的な場所として把握する視点である。本章では、前者の事態把握に基づく空間移動の場合は、起点と着点をモノ的な〈点〉のイメージ・スキーマによって規定している。これに対し、後者の事態把握に基づく空間移動の場合には、起点と着点は、空間的な〈容器〉のイメージ・スキーマによって規定している。以上のイメージ・スキーマ理論に基づく分析は、動詞 go の物理的な空間移動と抽象的な状態変化に関する一般的な意味規定を可能とする。このうち前者の空間移動の意味分析は先行研究にも存在するが、これまでの研究では、この空間移動の事態認知の下位分類はなされていない。これに対し本章では、空間移動の事態認知のモードとして、起点フォ</p>	

ーカスの認知モード、経路フォーカスの認知モード、着点フォーカスの認知モードの三種類の認知モードの存在を明らかにし、この三種類の事態認知のモードの分布関係を、フォーカス・シフトの認知プロセスのメカニズムに基づいて説明している。

第四章では、メタファー理論とイメージ・スキーマ理論に基づき、移動動詞の come の空間移動と（空間移動からの比喩的な意味拡張に起因する）状態変化の意味の諸相を考察している。本章では、まず状態変化の意味の拡張用法として、come が結果を示す形容詞と共に起る表現（e.g. come true）が考察の対象となる。移動動詞としての come は、基本的には移動の到達点をマークする前置詞（e.g. to, into）と共に起るが、結果の状態を示す形容詞とも共に起る。言語学の先行研究では、この種の用法に関する文法的な事実は指摘されているが、その意味的な動機づけに関する考察はなされていない。本章では、この種の拡張用法は、基本的に〈状態の変化は比喩的な移動〉という言語主体の主観的な認知のモードに起因する事実を明らかにし、移動動詞の状態変化の意味への比喩拡張のメカニズムを明らかにしている。

本章ではさらに、come の拡張用法として、対象の知覚、出現、出自、出身、等の移動表現の意味拡張の諸相を明らかにしている。先行研究では、この種の表現は、慣用表現としての記述にとどまっている。これに対し本章では、このタイプの表現は、〈視界は空間的な容器である〉というメタファーの認知モードに起因するとしている。このメタファーによる意味拡張を考慮するならば、視界を意味する名詞（i.e. view）が基本的に空間移動を示す前置詞の into と共に起る事実が自然に説明される。さらに、動詞の come には、出現を意味する用法が存在する（e.g. The moon came out.）。月が現れる事態を表現するこの種の例では、主語で表される存在が認知主体の前に文字通りに移動して出てくる訳ではない。本章では、この種の出現の拡張的な意味の創発を、基本的に起点から着点への物理的な移動を示すイベント・スキーマの起点（i.e. 移動の出発点としての場所ないしは空間）の背景化（defocusing）の認知分析によって規定している。

第五章では、動詞 go の基本的な意味と派生的な意味の創発のメカニズムに関する認知分析を試みている。動詞 go の基本的な意味は、起点から着点に向かう物理的な移動であるが、この動詞にはさらに、経路移動、状態変化、消失などの派生的な意味が存在する。本章では、go の基本的な意味から経路移動への意味拡張は、この動詞が起動する移動イベント（i.e. 〈起点—経路—着点〉の移動イベント）の起点から経路へのフォーカス・シフトの認知モードによって規定している。この経路移動の典型例としては、{He's going too fast. /The car was going much too fast.} が挙げられる。この移動動詞の状態変化の用法は、典型的には [X+Go + Adj.] の構文で表現される（e.g. John went crazy. The milk went sour.）。この移動動詞が状態変化の意味に拡張する点は come と同じであるが、本章では、この種の意味拡張のプロセスを〈状態の変化は比喩的な移動〉という言語主体の主観的な認知のモードによって統一的に説明している。

最後の第六章は、認知言語学の枠組に基づく本研究の意義と今後の研究に関する一般的な展望を論じている。

## 論文審査の結果の要旨

氏名	村松 擁
論文題目	英語移動動詞の意味拡張に関する認知言語学的考察 — come/go を中心に —
要 旨	
<p>本論文は、認知言語学の観点からみた英語の移動動詞の意味拡張のメカニズムの理論的・実証的研究である。最近の認知分析に基づく移動動詞の研究に関しては、(i) 移動動詞を基本的に特徴づける空間移動、(ii) 空間移動の方向性と視点の投影、(iii) 空間/移動の概念化とスキーマ化に基づく意味変化の研究が中心的な研究テーマとなっている。これまでの研究は (i) の側面に関する研究が中心になり、(ii) と (iii) に関わる移動動詞の研究は等閑視されている。本研究は、(i) の研究を批判的に検討するとともに、これまで等閑視されていた (ii) と (iii) に関する移動動詞の分析を試みる統合的な研究として位置づけられる。</p> <p>分析方法に関しては、これまでの移動動詞の研究は、意味素性の概念分析に基づく研究が中心になっており、認知言語学的な観点からの移動動詞の意味分析は広範にはなされていない。本研究は、新たな認知理論的な枠組み（特に、認知言語学の下位理論を構成するイメージ・スキーマ理論、メタファー理論、視点投影理論）に基づき、上述の (i)～(iii) に関わる移動動詞の意味分析を試みている点に独創性が認められる。</p> <p>また、本研究の実証的な独創性は次の点にある。第一に、移動動詞 (go, come) の意味構造を単なる物理的な空間移動として捉えるのではなく、ある存在が出発点から経路を通過して目的地に移動していく事象として捉え直し、この事象を〈起点—経路—着点〉のイメージ・スキーマによって規定している。第二に、この種の動詞が空間移動だけでなく、抽象的な状態変化も表現する事実に注目し、状態変化の意味拡張をメタファー理論に基づく概念写像によって規定する点に実証的なオリジナリティーが認められる。</p> <p>以上のイメージ・スキーマ理論とメタファー理論に基づく分析は、移動動詞の物理的な空間移動と抽象的な状態変化に関する一般的な意味規定を可能とする。このうち前者の空間移動の意味分析は先行研究にも存在するが、これまでの研究では、この空間移動の事象認知のモード規定はなされていない。これに対し本研究では、空間移動の事象認知のモードとして、起点フォーカスの認知モード、経路フォーカスの認知モード、着点フォーカスの認知モードの三種類の認知モードの存在を明らかにし、この三種類の事象認知のモードの分布関係を、フォーカス・シフトの認知のメカニズムに基づいて説明している点が注目される。</p> <p>本研究ではさらに、移動動詞の拡張用法として、対象の知覚、出現、出自、出身、等の意味拡張を可能とする認知のモードを明らかにしている。例えば対象の知覚の用例としては、The ship came into view. が典型例として挙げられる。先行研究では、この種の表現は、慣用表現としての記述にとどまっている。これに対し本研究では、このタイプの表現</p>	

は、〈視界は空間的な容器である〉というメタファーの認知モードに起因する事実を明らかにしている。このメタファーによる意味拡張を考慮するならば、上記の例の視界を意味する名詞 (i. e. view) が基本的に空間移動を示す前置詞の into と共起する事実が自然に説明される。さらに、動詞の come には、出現を意味する用法が存在する (e. g. The moon came out.). 例えば、月が現れる事態を表現するこの種の表現では、主語で表される存在が認知主体の前に文字通りに移動して出てくる訳ではない。本研究では、この種の出現の拡張的な意味の創発を、基本的に起点から着点への物理的な移動を示すイベント・スキーマの起点の背景化 (defocusing) の認知分析によって規定している点に独創性が認められる。

また本研究では、動詞 go の消失の意味への拡張 (e. g. He is gone.) を、対象の知覚行為のイメージ・スキーマに関わる認知のモードによって規定している。本研究では、基本的に知覚行為は、視界への知覚対象の出入りのメタファーによって規定される。この規定に従うならば、見えるプロセスは〈視界内への知覚対象の移動〉のメタファーによって自然に理解される。また、消失 (i. e. 見えなくなる) のプロセスは、〈視界外への知覚対象の移動〉のメタファーによって規定される。さらに動詞 go には、移動の着点の意味に関する慣用的な用法が認められる (e. g. She went to {school/church}.). 従来の研究では、この種の構文は、慣用表現として一括されている。これに対し本研究では、この種の構文の慣用的な意味拡張を、着点の名詞がになうメトニミー的な意味機能 (i. e. [場所・施設]---→[(その場所・施設)での制度的な行為] というメトニミーの意味機能) に基づいて一般的に説明している。

以上、本研究は、メタファー、メトニミーの認知能力に基づいて、移動動詞の go と come の意味拡張の創造的なメカニズムの諸相を明らかにした独創的な研究として高く評価できる。さらに本研究は、移動動詞の歴史的な意味変化の分析のための基礎研究としても重要な知見を提供する。本論文ではこの種の歴史言語学的な分析はなされていない。この方面の通時的な研究は今後の課題として残される。

#### 審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	山梨正明
副査	教授	益岡隆志
副査	教授	柿木重宜

### 最終審査の結果の要旨

氏名	村松 擁
試験科目	
判定	合格・不合格
要旨	
<p>学位申請者の研究成果を確認し、審査するため、博士論文を中心に口述試験を実施した(2022年1月27日)。</p> <p>申請者は、本研究のための言語学の理論的枠組み(特に、一般言語学と認知言語学の理論的枠組み)を十分に体得し、言語現象の分析に適切に適用している。また、本研究に関連する国内、国外の重要な論文、研究書、等の文献を精読し、その知見を本研究に適切に反映している。申請者は上述の口述試験において、以上の学問的な知識と研究能力を背景に、論文内容に関する理論面、実証面の質問に対し明確にかつ的確に答えることができた。尚、本論文の研究成果の一部は、言語学と文法研究の学会誌、紀要、等に掲載され、高い評価を得ている。以上の点においても、本研究は、言語学の関連学会における学問的水準に達している。申請者の外国語の試験については、日本語により執筆された学位論文と日本語、英語、中国語の要約における高い表現力と理解力から判断し試験を免除した。</p> <p>以上の諸点を総合し慎重に判断した結果、審査委員会は、本博士論文に対し全員一致で博士(言語文化)の学位授与を適格と認め、合格と判断した。</p>	

#### 審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	山梨正明
副査	教授	益岡隆志
副査	教授	柿木重宜